

# 思春期・不登校状態の子どもの子育てに悩む保護者に対する ペアレントトレーニング実施の効果

肥 後 祥 治\*・前 野 明 子\*\*

(2018年10月23日 受理)

## Effects of a Parent Training Program for Parents who Have a Pupil with School Refusal in Puberty

HIGO Shoji, MAENO Aiko

### 要約

我々は、地域に根ざしたりハビリテーション（CBR）の視点に基づき、平成25年度から行政機関（教育委員会）と協働し、「行動分析保護者ワークショップ」を実施している。このプログラムは、全5回で望ましい行動の形成を主とした内容であり、主に小学校低学年の子どもに取り組みやすいプログラム構成であるが、回数を重ねるごとに思春期や不登校状態の子どもの子育てに悩む保護者の参加も増え、参加する保護者の多様なニーズに十分に応えられないという課題に直面した。

そこで、本研究では、思春期や不登校状態の子どもの子育てに悩む保護者に対して、平成25年度から実施している行動分析に基づくペアレントトレーニングに、コミュニケーションワークを加えた全5回のプログラムを実施し、その効果について検討を行った。その結果、全参加者の行動分析に関する知識量が増加し、参加者全体の抑うつ度が軽減する効果があり、家庭において「子どもが以前よりも穏やかに話を聞いてくれるようになった」等、思春期の親子間の関係性にも肯定的な影響が確認できた。

**キーワード：**ペアレントトレーニング、コミュニケーションワーク、思春期、不登校

\* 鹿児島大学 法文教育学域 教育学系 教授

\*\* 鹿児島大学大学院 教育学研究科 院生

## I. 問題と目的

山上(1998)は、「親訓練」について、「親は自分の子どもに対して最良の治療者になることができる」との考えに基づき、親が子どもへの対処や家庭内の関係を改善するための新しい技術と方法を学習する訓練であると述べている。ペアレントトレーニングは、1960年代にアメリカを中心に始まり、日本でも「親訓練」や「ペアレントトレーニング」などの名称で実施されている。

肥後・有村は、P市において平成25年度から地域に根ざしたリハビリテーション(CBR)の視点に基づき、行政機関(教育委員会)と協働し、「インストラクタートレーニングプログラム」を受講した教師を各グループのインストラクターとして「行動分析保護者ワークショップ」を実施している。このプログラムは全5回で、望ましい行動の形成を主とし、主に小学校低学年の保護者が取り組みやすい内容である。対象者は、P市内の全公立小・中・高等学校の保護者であり、各学校を通じて募集を行っている。プログラムの効果については、修了後に参加者の行動分析に関する知識量の増加や、抑うつ度の改善といった結果が得られている(木下, 2014)が、年々思春期の子どもとの親子関係や不登校状態の子どもの子育て悩む保護者の参加が増え、従来のプログラムでは、参加者の多様なニーズに十分応えられないとの課題に直面した。

松尾・井上(2013)も、思春期は、子どもやその保護者の持つニーズがそれ以前と異なることから思春期以降のペアレントトレーニングにおいては、プログラムの内容を変更する必要性があると指摘し、思春期に特化したプログラムを実施している。

そこで、本研究では、P市で実施してきた「行動分析保護者ワークショップ」のプログラムをベースに、コミュニケーションワークを加えて修正し、思春期や不登校状態の子どもの子育てに悩む保護者のグループに対してプログラムを実施した効果の検討を目的とする。

## II. 方法

### 1. 対象者

対象者は、P市教育委員会主催のペアレントトレーニング研修会に参加した保護者13名。子どもの年齢の内訳は、小学生4名、中学生8名、高校生1名で、小学生の保護者の主訴はいずれも不登校であった。中学・高校生の保護者の主訴は、不登校のほか、子どもとの関わり方であった。

### 2. プログラム実施スタッフ

スタッフは、ファシリテーターの大学教員1名の他、P市教育委員会主催のインストラクター養成研修を受講した教職員4名、公的相談機関の相談員(元教員)1名、臨床心理士1名が、1グループに2名ずつインストラクターとして入った。

### 3. 実施期間及び実施場所

X年10月22日～X+1年1月21日の期間に隔週を基本にして、1回2時間、全5回のプ

プログラムをP市教育総合センターにて実施した。

#### 4. プログラムの内容

本プログラムは、肥後（2016）を基にして、平成25年度からP市で実施している行動分析保護者ワークショップのプログラムに、コミュニケーションワークを加えて修正し、平成28年度から実施している。

本プログラムのテーマと内容は表1の通りである。

表1 プログラムのテーマと内容

日付	回数	テーマ	内容
10月22日	第1回	子どもの指導をスムーズに進める知恵	行動分析の基本的事項・課題選定
11月5日	第2回	子どもの行動を育ててみましょう	行動を増やす手立て
11月19日	第3回	行動が続くにはわけがある	行動を減らす時の3つの方向性
11月26日	第4回	うまくいかない時は、自分を見直すチャンス	行動を減らす時の3つの方向性②
12月17日	第5回	子どもは私たちから学んで成長し、私たちも子から学んで成長する	経過報告・全体でのシェアリング
1月21日		フォローアップ	経過報告・全体でのシェアリング

プログラムの内容は、第1回は行動分析の基本的事項の学習と課題選定を行い、次回までのような記録を取るか決め、宿題とする。第2回は子どもの望ましい行動を増やす手立てとして①強化刺激、②行動形成の5つの技法（課題分析、チェイニング、プロンプトとフェーディング、プレマックの原理、トークンエコノミーシステム）について学習した上で、自分の記録の分析を行い、取り組みの内容を修正する。宿題の記録の分析、取り組みの修正は第5回まで継続して行う。

第3回、第4回は行動を減らす3つの方向性として①他行動分化強化（適切な行動に対応し、不適切な行動には対応しないことで、行動の発生比率を変える）、②嫌悪刺激（行動を減らす働きかけをする）、消去（行動を増やす働きかけをやめる）、③機能的コミュニケーション訓練（同じ役割を持つ他の行動に置き換える）について学習し、取り組みの結果、子どもの行動に良い変化がみられて次のテーマに取り組む場合には、課題を修正する。第5回は経過報告と全体のシェアリングを実施し、プログラムのまとめを行った。

毎回、アイスブレイク、講義、グループワークの流れで実施し、全体の進行をファシリテーターが行い、グループワークの進行、行動目標及び宿題の選定の援助を各グループのインストラクターが行った。

各回のプログラム構成は表2の通りであった。

本プログラムの狙いとして、講義前のアイスブレイクで「私の幸せニュース（最近の些細な良かったことを報告する）」、講義後のグループワークで「いいこと探しW（グループで、話し手と聞き手を決める。話し手が昨日の夕方から今日までの出来事を、それぞれの場面でおこったことや感想を踏まえて3分話した後、聞き手が話し手の良いところを事実をふまえて5つ挙げてほめる。最後に残りのグループメンバーが聞き手の良かったところをほめる。）」という2

つのワークを取り入れて、保護者が行動分析に基づく子どもへのより良いかわり方を習得するだけでなく、保護者自身の日常生活における些細な良い出来事を見つける体験や他者の肯定的な側面に積極的に注目してほめる体験、他者からほめられる体験を通じて、家庭においても子どものポジティブな側面にも目を向け、親子間の関係性がよい方向にシフトすることを期待している。

表2 プログラムの構成

回数	導入(アイスブレイク)	講義	グループワーク
第1回	プログラムの導入(5分)	行動分析のイロハ+α(35分)	課題設定 (15分)
	リズム遊び(15分)	課題設定の方法(15分)	
	私の幸せニュースの導入(10分)	記録の方法・宿題の設定(10分)	
	グループメンバーについて知る(15分)		
第2回	リズム遊び(15分)	行動を増やす手立て(45分)	記録の分析、宿題の設定 (15分)
	私の幸せニュース(ペア)(8分)	①強化刺激	いいこと探しWの導入 (1回目) (20分)
		②行動を減らす逆転の発想	宿題の確認 (2分)
		③5つの知恵 記録の取り方・分析方法(15分)	
第3回	リズム遊び(10分)	行動を減らす時の3つの方向性(50分)	記録の分析、取り組みの再検討(30分)
	私の幸せニュース(ペア)(7分)	①とりあえずゆっくり・外堀コース	いいこと探しW (2回目) (20分)
		②簡単にくじけない・ちょっと冒険コース	宿題の確認 (3分)
第4回	びた〜ふわ〜(12分)	行動を減らす時の3つの方向性②(15分)	記録の分析、取り組みの再検討(40分)
	私の幸せニュース(グループ)(15分)	③いつかはやりたい王道コース プログラムの修正	いいこと探しW (3回目) (30分) 宿題の確認 (5分) (レポート課題について説明)
第5回	びた〜ふわ〜(12分)		これまでの経過とプログラムの修正 (45分)
	私の幸せニュース(5回目)(10分)		全体でのシェアリングと質疑 (35分) クロージング (10分)

## 5. 評価方法

参加者の行動分析に関する理解度や保護者自身の抑うつ状態の変化を明らかにする目的で、プログラム実施の前後で以下の質問紙への記入を依頼した。また、プログラム終了時にアンケートを実施し、プログラムの効果を評価した。

### 1) 行動分析に関する知識量の評価

KBPAC (Knowledge of Behavior Principles as Applied to Children) (O'dell et. al., 1979) の簡略版 (志賀, 1983) を用いて、行動分析に関する知識量の変化を評価した。このKBPAC (簡略版) は、25項目の質問項目で構成されており、各質問に対し4つの選択肢が提示され、その中から最も適切なものを1つ選ぶ形式である。高い得点ほど行動分析の知識が増えたことを示す。

### 2) 抑うつ状態の変化の評価

日本語版 BDI- II (Beck Depression Inventory-Second Edition) を用いて、抑うつ状態の変

化を評価した。このBDI- IIは、21項目の質問項目で構成され、「今日を含むこの2週間の気持ちに最も近い文章」を4つの選択肢から選ぶものである。高い得点ほど抑うつ性が高いことを示す。

### 3) プログラム参加による変化とプログラム内容に関する評価

最終回の第5回目終了時にアンケートを実施した。①新たな知識を学ぶことができたか、②自分の行動に何か良い変化があったか等7項目について「大変そう思う」「そう思う」「あまり思わない」「全く思わない」のリッカート法（4件法）で評価を求めた。

## 6. 倫理的配慮

本研究は、その目的、方法について口頭や文書で対象者に説明し、分析・検証することについては、同意の上で行われた。

## Ⅲ. 結果

BDI- II及びKBPACのデータについて、対象者13名のうち第5回を欠席した2名を除く11名のデータを分析した。結果は以下の通りである。

### 1. 行動分析に関する知識量の変化

KBPACの参加前後の参加者全体の平均値を図1と表3に示し、事前事後の個人の得点を図3に示した。KBPAC得点は全参加者が増加し、平均値は事前8.63点、事後13.10点で、平均4.47点上昇した。t検定の結果、1%水準で有意差が認められた。

### 2. 抑うつ状態の変化

BDI- IIの参加前後の平均値を図2と表4に示し、事前事後の個人の得点を図4に示した。BDI- II得点の平均点は、事前13.64点、事後8.18点で、平均5.46点減少した。t検定の結果、5%水準で有意差が認められた。

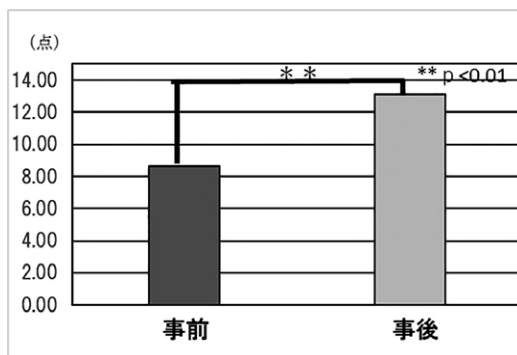


図1 KBPAC得点の参加前後の変化(全体)

表3 KBPACの事前と事後の平均

	事前	事後	有意差
KBPAC 平均	8.63	13.10	1%水準で有意差あり
	(SD=3.3)	(SD=4.8)	

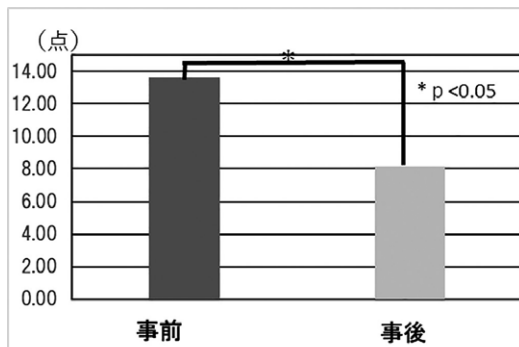


図2 BDI- II 得点の参加前後の変化 (全体)

表4 BDI- II 得点の参加前後の変化 (個人)

		事前	事後	有意差
BDI-II	平均	13.64	8.18	5%水準で有意差あり
	(SD)	(SD=12.0)	(SD=11.40)	

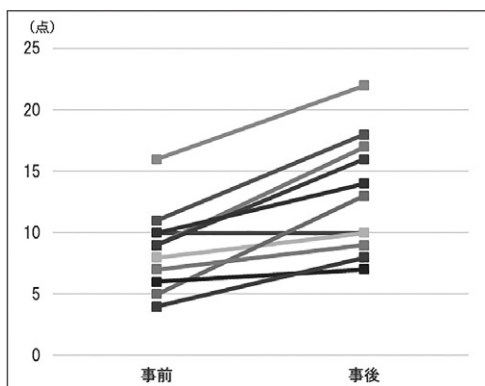


図3 KBPAC 得点の参加前後の変化 (個人)

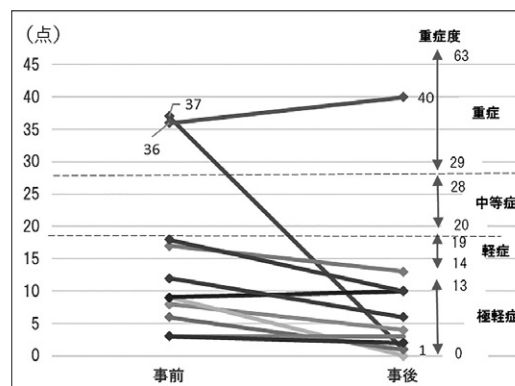


図4 BDI- II 得点の参加前後の変化 (個人)

### 3. プログラム参加による変化とプログラム内容に関する評価

事後アンケートの結果を表5に示した。アンケートの結果、7項目すべてについて参加者全員が肯定的な評価であった。

項目別にみると、項目1「新たな知識を学ぶことができたか」、項目2「新たな技術を学ぶことができたか」について全員が「大変そう思う」「そう思う」と評価した。自由記述では、「すべての行動には理由があるということを学べたことは大きかった」「視点を変えることの必要性を感じた」との記述がみられた。

項目3「自分の行動に何か良い変化があったか」、項目4「子どもの行動や状態に何か良い変化があったか」についても、全員「大変そう思う」「そう思う」と評価した。自由記述では、自分の行動について「自分の行動が子ども達の行動のスイッチになっている可能性もあるとの事で少し冷静に対処できたような気がする」「自分がいつも子どもを脅していることに気づかされ、自制心をもって子どもに対応できるようになった気がする」との記述があり、子どもと接するときに、冷静に対応できるようになったと感じる保護者が複数いた。子どもの行動については「登校復活し、友人とも交流しやすくなっている」「パニックを起こす回数が少し減った」との記述があり、登校状態の改善やパニックの発生頻度の減少など行動面の肯定的な変化

があったとの報告があった。また、「以前より穏やかに話を聞いてくれるようになった」「本当の気持ちを話してくれるようになった」との記述もあり、親子間のコミュニケーションに良い変化を感じている参加者もいたことがわかった。

項目5「幸せニュースのワークは活動に入れてよかったか」、項目6「いいこと探しのワークは活動に入れてよかったか」についても、全員が肯定的な評価だった。自由記述では「良いことがたくさんあるのを思い出せた」「普段自分の幸せを考えることがないため、幸せを探すこと、皆に言うことでさりげない幸せを実感できた」と、自分の身の回りにある些細な幸せ、良い出来事に目が向くようになったとの報告があった他、「聞くだけではなく、その後に第三者からコメントをもらうことで気付くこともたくさんあった」と、他者から肯定的なフィードバックをもらうことで、自身の気づきが深まったとの報告もあった。「全てが間違っているのではなく、間違っていていいんだと思えることができた」「自己肯定感を高められた感じがした」との記述もあり、ワークを通じて、自己受容や自己肯定感にも良い効果があったと感じていることが分かった。また、「他の方の幸せニュースをきくことで心が穏やかになった」「話し手の事を理解でき、こちらまで幸せな気持ちになれた」と、他者とポジティブな出来事を共有することで、心が穏やかになる体験や、他者の幸せにも共感的に目を向ける体験をしていたことが分かった。グループでの体験については、「自分の嬉しかったことをグループでシェアしあうことはとても有意義で、かつグループの関係も良好になると思う」「嬉しかったことをシェアすることでグループの交流、結束も深まると思った」との記述もあり、2つのワークを通じて、グループメンバーの関係性に良い影響を与えると感じている参加者がいたことも分かった。

項目7「今後も機会があればまた参加したいか」も全員が肯定的な評価であった。プログラム全体の感想については「参加して前に進める気がしてきた。できれば保護者が学べる場が欲しい。今回で終わるのはとても残念だ」「子のことを学ぶつもりが自分がガチガチだったことに気づかされた。日々子どもも成長しているので、立ち止まっているのは親の方かもと思った」との記述があり、プログラム参加により、保護者自身が前に進める感じを実感したり、子どもに対する自分の在り方を振り返る機会となったことが分かった。

表5 事後アンケートの結果

項目	質問内容	大変 そう思う	そう 思う	あまり 思わない	全く 思わない	平均
1	新たな知識を学ぶことができたか	8	3	0	0	3.72
2	新たな技術を学ぶことができたか	8	3	0	0	3.72
3	自分の行動に何か良い変化があったか	7	4	0	0	3.63
4	子どもの行動や状態に良い変化や兆しがあったか	5	6	0	0	3.45
5	「幸せニュース」のワークは活動に入れて良かったか	8	3	0	0	3.72
6	「いいこと探し」のワークは活動に入れて良かったか	6	5	0	0	3.54
7	今後も機会があればまた参加したいか	9	2	0	0	3.81

#### 4. 抑うつ度が高かった2名についての検討

事前のBDI-II得点の重症度評価が重症レベルであった2名のうち、1名は事前37点が事後1点となり、極軽症レベルに低減した(事例1とする)。もう1名は事前36点が事後40点となり、事後の得点が増加した(事例2とする)。それぞれのアンケート結果を分析すると、事例1は「自分の行動の良い変化」について「初めから一番直したいことに目を向けるのではなく、小さいと思っているけど実は小さいことではないことに目を向けることによって直したいことに近づけていけるのだと思いました」と回答し、「子どもの行動や状態の良い変化」については、「ごみすてに取り組んでから、何も言わずに進んでごみを捨てに行くようになり、それにとまなうように学校にも行けるようになりました」と回答している。事例2は「自分の行動の良い変化」について「相変わらず、感情的に怒ってしまう事も多々あり反省しますが、その中でも少しずつ自分を振り返ることができるようになった」と回答し、「子どもの行動や状態の良い変化」について「日々の生活に疲れていると出来ない事も多いのですが、それでも不思議と自発的に頑張ろうとする姿勢が増えました」と回答している。また、事例2は「いいこと探しワーク」について「良いイメージ脳になれる。ネガティブ思考から抜け出せる」と回答した。事例1、事例2ともに保護者自身と子どもの行動レベルの良い変化を実感していた。事例2は「いいこと探しワーク」による認知レベルの肯定的変化を感じていたが、BDI得点の低減には至らなかった。

### IV. 考察

#### 1. 行動分析の知識量の変化について

参加者のKBPAAC得点は、事後の平均値が有意に増加した(図1、表3)。また、事後アンケートの結果は、全参加者が「新しい知識や技術を学ぶことができた」と回答した。保護者の行動面の変化については、事後アンケートにおいて全参加者が「良い変化があった」と回答し、参加によって子どもに冷静に対応できるようになったとの報告が複数見られた。また、子どもの行動面の変化についても全参加者が「良い変化や兆しがあった」と回答し、子どもがパニックを起こす回数が減ったケースや登校状態が改善したケースが2ケースあった。これは、保護者が行動分析的知識を獲得することが、保護者や子どもの行動に肯定的な変化をもたらすとの他の研究(免田・伊藤・大隈・中野・陣内・温泉・福田・山上, 1995; 山上, 1998; 岩坂・楠木・大西, 2003)を支持する結果となった。以上の結果から、本プログラムは、参加者の行動分析に関する知識量を増やす効果があり、保護者が行動分析に基づく子どもとの関わり方を学習、実践することで、保護者及び子どもの行動に肯定的な変化を及ぼすと考察する。

#### 2. 抑うつ度の変化について

参加者のBDI-II得点は、事後の平均値が有意に低減した(図2、表4)。これは、2つの要因があると考察する。一つ目は、前項でも述べた通り、本プログラム参加により、保護者及び子どもの行動に肯定的変化が見られた結果、保護者の抑うつ度が軽減したと考える。これ



は、ペアレントトレーニング参加により保護者及び子どもの行動が改善し、保護者の抑うつ度が減少するとの他の研究（免田・伊藤・大隈・中野・陣内・温泉・福田・山上, 1995；山上, 1998；福田・中藤・本多・興津, 2005）とも一致する。二つ目は、本プログラムでは、行動分析に基づく子どもへのより良い関わり方の講義に加えて、保護者自身の日常生活における些細な良い出来事を見つける体験や他者のポジティブな側面に積極的に目を向けてほめる体験、他者からほめられる体験を通じて、保護者の視点がよりポジティブな方向に変化することを狙いとして講義の前後にコミュニケーションワークを導入した。このコミュニケーションワークの体験も、保護者の抑うつ度を軽減させる効果があったと考える。事後アンケートの結果では、「幸せニュースのワーク」「いいこと探しのワーク」により、自分のささいな幸せへの気づきや、他者と幸せを分かち合う体験、他者からほめられる体験により、心が穏やかになったり、自己肯定感が高められたと感じたことが報告された。また、本山ら（2012）は、岩坂ら（2002）の研究結果を踏まえて、グループの自助的な相互サポート機能がプラスの相乗効果を生み出すことや、親同士の共感や励まし参加者の養育自信度や抑うつ度の改善の大きな要因であると述べているが、本研究の事後アンケートでも「自分の嬉しかったことをグループでシェアすることで、グループの交流、結束も深まると思った」との記述がみられた。コミュニケーションワークを導入することにより、グループメンバー間の肯定的な交流が促進され、グループの自助的な相互サポート機能を発揮したことも参加者の抑うつ度の改善に効果があったと考える。以上の結果から、本プログラムは、参加者の抑うつ度を軽減させる効果があり、行動分析に関する知識の習得による保護者及び子どもの行動面の肯定的な変化に加えて、コミュニケーションワークによる些細な良い出来事への肯定的な注目が増えたこと、グループにおける肯定的な交流の促進により相互サポート機能が働いたことが、抑うつ度の軽減をもたらしたと考察する。

また、事前のBDI- II得点の重症度評価が重症レベルであった2名について、事後の得点は1名が極軽症レベルに低減し、1名が得点がわずかであるが上昇した。この2名の事後アンケートでは、両者とも保護者の行動、子どもの行動ともに良い変化があったと回答した。アンケートの結果上、差は認めなかったが、得点が上昇した1名については抑うつ度の低減を図ることができなかった。保護者及び子どもの行動が肯定的に変化し、コミュニケーションワークの体験についても肯定的に評価しているにも関わらず、BDI- II得点が低減しないケースもあることが明らかとなったことについては、今後の課題である。

### 3. コミュニケーションワークの効果について

前項でも述べた通り、コミュニケーションワークを通じて、保護者の視点がよりポジティブに変化することで、家庭においても子どもに対する肯定的な注目が増え、親子間の関係性がより肯定的な方向にシフトすることを期待して、行動分析の講義の前後にコミュニケーションワークを導入した。事後アンケートでは、家庭において「子どもが以前よりも穏やかに話を聞いてくれるようになった」「子どもが本当の気持ちを話してくれるようになった」と親子間のコミュニケーションに良い変化があったとの報告の他、「子どもも自分のことを自分でやろうとして

いる」と子どもの努力を認める報告もあった。今回、行動分析の講義の前後にコミュニケーションワークを導入したことで、保護者の視点がよりポジティブに変化し、家庭においても子どもに対する肯定的注目が増え、親子関係が肯定的な方向にシフトする効果があったと考察する。

#### 4. まとめと今後の課題

本研究では、思春期・不登校状態の子どもの子育てに悩む保護者に対して、行動分析に基づくペアレントトレーニングにコミュニケーションワークを加えた全5回のプログラムを実施し、その効果について検討を行った。その結果、全参加者の行動分析に関する知識量が増加し、参加者全体の抑うつ度が軽減する効果があった。また、コミュニケーションワークの導入により、参加者の抑うつ度の軽減に効果があった他、家庭において「子どもが以前よりも穏やかに話を聞いてくれるようになった」等、思春期の親子間の関係性にも肯定的な効果があった。

今後の課題としては、本プログラムは全5回と1回のフォローアップで終了するプログラムだが、効果の維持を図るためには、フォローアップの回数を増やすことも検討の余地がある。また、今回、事後アンケートの結果上は、肯定的変化が見られたもののBDI-II得点が下がらなかった1名について、5回の回数を増やして実施することで、BDI-II得点の軽減を図ることができた可能性もある。BDI-II得点が下がらなかったケースに対するプログラムの工夫についても今後の課題である。

#### 文献

- 有村玲香・肥後祥治・脇博美・前野明子・紀章子・後藤裕司・斎藤宇開 (2018) 地域に根ざした保護者支援システム構築の試みー既存の社会資源としての教職員の可能性と課題ー. 日本特殊教育学会第56回大会発表論文集, 自主シンポジウム4-01.
- 岩坂英己・清水千弘・飯田順三・川端洋子・近地操・大西貴子・岸本年史 (2002) 注意欠陥/多動性障害児 (ADHD) の親訓練プログラムとその効果について. 児童青年精神医学とその近接領域, 43, 483 - 497.
- 岩坂英己・楠木伸枝・大西貴子 (2003) AD/HD (注意欠陥多動性障害) を持つ子どもへの親訓練プログラム家族会版の開発と実践ー家族による家族のための援助法としてー. 明治安田こころの健康財団研究助成論文集, 39, 181-184.
- O'dell S. L., Traler-Senlolo L. and Flynn J. M. (1979) :An Instrument to Measure Knowledge of Behavior Principles as Applied to Children. J. Rehav. Ther. & Psychit. 10, 29-34.
- 木下真由美 (2014) 「CBRに基づく親訓練プログラムの効果と今後の方向性についての研究」. 鹿児島大学教育学部特別支援教員養成課程平成26年度卒業論文.
- 志賀利一 (1983) 行動変容と親トレーニング (その知識の獲得と測定). 自閉症教育研究, 6, 31-45.
- 中山政弘 (2014) 肥前方式ペアレント・トレーニング短縮版開発に関する研究. 福岡県立大学心理臨床研究, 6, 111 - 118.
- 肥後祥治 (2016) 行動分析保護者ワークショップ「どんどん、のびろ」資料集. 平成23～26年度科学研究費助成事業科学研究費補助金 (基盤研究 (B)) 「地域療育及び特別支援教育体制構築にむけた新パラダイムの提案に関する実践的研究」成果報告書別冊.
- 福田恭介・中藤広美・本多潤子・興津真理子 (2005) 福岡県立大学における発達障害児の親訓練プログラムの評価 (2). 福岡県立大学人間社会学部紀要, 13, 2, 35-49.
- Beck AT, Steer RA, Brown GK, 著, 小嶋雅代, 古川壽亮, 訳著 (2003) 日本語版BDI-II 手引. 日本文化科学社.
- 松尾理沙・井上雅彦 (2013) 思春期の発達障害児を持つ親のためのペアレントトレーニングプログラムの開発. 発達研究, 27, 71 - 80.
- 免田賢・伊藤啓介・大隈絃子・中野俊明・陣内咲子・温泉美雪・福田恭介・山上敏子 (1995) 精神遅滞時の親訓練プログラムの開発とその効果に関する研究. 行動療法研究, 21, 1, 25-38.
- 本山和徳・松阪哲應・長岡珠緒・松尾光弘 (2012) 発達障害児の養育に困難感を抱く母親に対するペアレントトレーニングの効果. 脳と発達, 44, 289-294.
- 山上敏子 (1998) 発達障害児を育てる人のための親訓練プログラムーお母さんの学習室ー. 二弊社.